

北海道医療大学学術リポジトリ

相談援助実習におけるOSCE（客観的臨床能力試験） 試験項目の評価 学生及び評価者の調査結果から

著者	巻 康弘，近藤 尚也，川勾 亜紀奈，福間 麻紀，松本 望，鈴木 幸雄
雑誌名	北海道医療大学看護福祉学部紀要
号	23
ページ	33-41
発行年	2016-12-20
URL	http://id.nii.ac.jp/1145/00064407/

<論文>

相談援助実習におけるOSCE（客観的臨床能力試験）試験項目の評価 —学生及び評価者の調査結果から—

巻 康弘*、近藤尚也*、川勾亜紀奈*、福間麻紀*、松本 望*、鈴木幸雄*

抄 録：本研究では、相談援助実習におけるOSCE（Objective Structured Clinical Examination:客観的臨床能力試験）を3つの試験項目で実施し、学生調査及び評価者調査を行い、試験項目に対する評価を明らかにするとともに、より効果的なOSCEを開発する上での検討課題を明らかにすることを目的とした。OSCEの試験項目（ブース）は、インテーク面接（Aブース）、アセスメント報告（Bブース）、実習日誌記載・提出（Cブース）とし、相談援助実習（本学科目名：ソーシャルワーク実習）を控えた学生101名に実施した。

学生調査結果では、9割以上の学生がOSCEの目的を理解した上で試験に臨んでおり、OSCEの形式でスキルが測られることを有効であると肯定的に捉えていた。加えて、試験項目を構成する指示内容・試験時間・評価項目・試験問題の項目を8割以上が肯定的に捉えているものの、自由記述の中には、実習日誌記載・提出に「枚数指定や字数指定があったほうが良い」等の指摘もあった。

さらに、評価者調査からは、学生の出来栄の経年的変化が示された他、「どこがポイントか」がわかる評価項目である点や、「準備状況」がわかる試験問題（事例）である点など、概ね肯定的評価がなされた。こうした肯定的評価を前提としながらも、「インテーク面接」では、迎え入れの態度に関する「導入部分はほとんどの学生が出来ている」が、「冒頭の一連の流れが長い。面接技法の評価が実質的に4分程度」となり、「主訴をピンポイントで理解するというのは難しい」と、導入部の簡素化といった評価項目の見直しに関する指摘もあり、今後の評価項目の改良に向けた検討事項も示され、相談援助実習におけるOSCE試験項目をさらに充実させていくための検討課題が明らかとなった。

Key Word：OSCE 相談援助実習 実習前評価システム 実践力 社会福祉士養成教育

1. はじめに

社会福祉士養成教育においては、より高度な実践力養成の観点から、相談援助実習の重要性が高まっている。実践力養成において重要な要素となる技術・技能を評価する方策としてOSCE（Objective Structured Clinical Examination）がある。OSCEは、医学・歯学等の医療分野では共用試験が実習前に行われるなど広く一般化している客観的臨床能力試験である。社会福祉分野では、久能ら（2009）の研究や社会福祉士養成校協会北海道ブロック（以下北海道ブロック）（2011）での取り組み等がある。

り、北海道ブロックでは、相談援助実習における実習前評価システムの主要要素として施行の申し合わせがなされている。

大滝（2007）は、OSCEの特性について「『技能』を評価するには、OSCEは筆記試験よりはるかに妥当性が高い」ものの「個々の臨床技能は特異性が高く、ある技能ができたとしても他の技能ができるとは限らない」と述べている。この観点からすると、北海道ブロックにおける実施状況は、概ねひとつの試験項目での実施となっており、相談援助実習で要求する主要な技術・技能に関して事前に評価するとの観点からすると十分とは言えない。

そこで本研究では、多様な技術・技能を評価する3つの試験項目（①インテーク面接、②アセスメント報告、

*看護福祉学部臨床福祉学科社会福祉学講座

③実習日誌記載・提出)によるOSCEを実施し、実施状況に対する学生及び評価者への調査結果から、試験項目に対する評価を明らかにするとともに、より効果的なOSCEを開発する上での検討課題を明らかにすることを目的とする。

2. 相談援助実習のねらいと相談援助実習評価項目

厚生労働省が示すシラバスの内容には、相談援助実習のねらいとして以下の点が示されており、「実践的な技術等の体得」や「技能の習得」が明記されている。

<ねらい>

- ・ 相談援助に係る知識と技術について具体的かつ実践的に理解し実践的な技術等を体得する。
- ・ 社会福祉士として求められる資質、技能、倫理、自己に求められる課題把握等、総合的に対応できる能力を習得する。
- ・ 関連分野の専門職との連携のあり方及びその具体的な内容を実践的に理解する。

さらに、教育に含むべき事項として、「利用者やその関係者、施設・事業者・機関・団体等の職員、地域住民やボランティア等との基本的コミュニケーションや人との付き合い方などの円滑な人間関係の形成」や「利用者理解の把握とその需要の把握及び支援計画の作成」など8項目が示されている。さらに、北海道ブロック相談援助実習評価表では、下位項目として中項目31項目（独自項目4項目含む）と小項目82項目を設定し、達成目標を明示した目標志向型実習としての性格を明確化させている。

3. 相談援助実習におけるOSCEの位置付けと活用

本学の相談援助実習におけるOSCEは、北海道ブロック「実習前評価システム施行申し合わせ」に基づき実施している。前述したように、相談援助実習は目標志向型実習としての性格を有する。この目標には、「～ができる」という実習生が試行的に実践できることも到達目標として設定されている。この到達目標を達成するためには、利用者との直接的・間接的に関わる実習体験がプログラム化される必要がある。しかし、こうした体験は、一定のリスクを伴うものである。そこで、利用者の利益の最優先の観点や、実習施設・機関のリスク回避の観点からも、実習前に実習適格性を評価する本システムは、相談援助実習において重要な位置を占めるシステムであり、OSCEはその主要要素である。

また、OSCE結果（評価表、OSCEの実施場面を録画したDVD）は、学生への開示とともに、実習適格性を示す資料として実習指導者にも開示される。この成績開示は同時に、利用者との直接的・間接的関わりを含む臨床参加型実習のプログラム化を要請する資料としての性格を有する。

このOSCE結果の活用実態については、近藤ら（2015）が示したように「全ての実習指導者が何らかの形で確認」し、「58%の指導者が活用」していた。その活用にあたっては「個別実習体験内容を検討する上での資料として」使用されていることが示唆された。このようにOSCEは、実習適格性評価の第一義的目的とともに、OSCE結果の活用により、個別学生の技術・技能の習得状況を共有する情報提供ツールとしても活用できる。

さらには、相談援助実習におけるOSCEで要求する内容は、相談援助実習の到達目標との関係で設定される。また、OSCEで要求する技術・技能は、講義や演習を通じた事前教育により習得される。

以上のように、相談援助実習におけるOSCEは、より高度な実践力養成を志向する社会福祉士養成教育において中核的な位置づけを有している。

4. 方法

1) OSCE試験項目の概要

OSCEの試験項目は、「インテーク面接」「アセスメント報告」「実習日誌記載・提出」の3試験項目を設け、各々の試験項目ごとの課題設計を行った。課題設計の主要な構成要素には、目的（表Ⅰ）、指示内容（場面設定含む）・試験時間・評価項目（表Ⅱ）、試験問題（表Ⅲ）の作成がある。2015年度OSCEの実施にあたっては、前年度OSCEを踏まえた巻ら（2014）による研究結果を踏まえ、「実習日誌記載・提出」の評価項目を「適切さ」評価を

<表Ⅰ 試験項目の目的>

試験項目	目 的
インテーク面接	クライアント（以下CL）を迎え入れる態度から、基本的なコミュニケーションスキル、面接技法を確認。
アセスメント報告	得られた（与えられた）情報から、CL像の把握、問題の抽出やニーズ分析、不足情報の指摘などのアセスメントの適切さ、口頭報告技術の適切さを確認。
実習日誌記載・提出	事前知識を踏まえた事象の観察能力、情報記憶力、自分を客観視する能力、客観的内容と主観的内容を区別し記載する文書表現能力等の実習日誌記載に必要な諸要素を踏まえ、実習日誌を適切に記載できるかを確認。

＜表Ⅱ 主な指示内容・試験時間等・評価項目＞

	インテーク 面接	アセスメント 報告	実習日誌 記載・提出
ブース	Aブース	Bブース	Cブース
受験者 設定	地域包括支援センターの社会福祉士	ある施設・機関の実習生	地域包括支援センターの実習生
場面 設定	CLからの相談をインテークする場面	ある施設・機関のカンファレンス場面(3事例検討予定)	メモの取れない体験後にとったメモを基にした実習日誌記載
詳細 設定	面接予約のあったCLが来所	直前に得られた情報を含めたアセスメントを説明	インテーク面接に関する体験内容を記載
試験 時間	7分: 面接 1分: 要約	3分: 再アセスメント 6分: 報告	10分: メモ取り(翌朝8:45～9:30提出)
その他 時間	4分: フィードバック 3分: 評価調整	3分: フィードバック 3分: 評価調整	注意事項指示
評価 項目	22項目+CL評価項目6項目	20項目	8項目(うち1項目は必須)

※評価項目及び評価上のポイント(例)は資料参照

加えたものに改良するとともに、すべての試験項目の評価項目について再検証し、評価の客観性向上を視野に個々の評価項目が何を評価するのかを示した評価上のポイント(資料に例示)に改良を加えたものとした。

なお、試験項目毎の場面は、①「地域包括支援センターの社会福祉士によるインテーク面接(Aブース)」、②「ある施設・機関の社会福祉士実習生によるアセスメント報告(Bブース)」、③「メモの取れない実習体験後に記載したメモ(Cブース)をもとに、実習日誌を記載・提出」する設定とした。これらの内容を含んだ指示内容を設定し、物理的空間配置(例)や留意事項(例: Aブースでとったメモは回収する)などをインストラクション用紙に明記し学生に配布した。

また、各試験項目(ブース)は、試験時間とフィードバックなどを含め15分設定とした。学生は、控室からAブースへ、Aブース終了後には隣室のBブースへ、Bブース終了後にはCブースへと3つのブース(教室)を回り試験を受ける。さらに、Cブースでメモ取りを行った後に控室に戻り、翌朝「実習日誌」を提出するという流れである。

さらに、試験問題は、インテーク面接及びアセスメント報告に関わる事例を開発し、実習日誌記載・提出では、インテーク面接(Aブース)における体験内容を試験問題として設定した。

なお、2015年度試験問題(事例)は、以下の通りである。

◎インテーク面接

「母(70代)の認知症と介護」についての息子又は娘からの相談。

◎アセスメント報告事例

事例① 認知症状のある橋本聖子(仮名)さんに関する親族からの入所相談(高齢者入所施設)。

事例② 知的障がいのある玉浦浩二(仮名)さんに関する母親からの利用相談(障がい者支援施設)。

事例③ 慢性疾患を伴い退院した横山景子(仮名)さんに関する親族からの相談事例(地域包括)。

＜表Ⅲ 試験問題＞

	インテーク 面接	アセスメント 報告	実習日誌 記載・提出
試験 問題 (事例)	・CL役事例概要統一 ・相談の動機づけを有するCL ・心情ポイントを明確化 ・CLの性差による差異は最小限 ・事例概要を踏まえた表出は自然な応答等	・異なる分野の3事例(試験は1事例) ・A4 8頁程度、8～10場面 ・面接や連携場面「逐語」 ・追加情報はA4 半頁程度 ※事例集(3事例)は、3週間程前の講義時に事前配布	・インテーク面接(Aブース)における体験内容

2) 評価段階についての考え方

OSCEの評価段階については、医療系OSCEを概観した時に、「1-0」の2段階から数段階まで種々の段階をスケールとして使用する方法がある。「1-0」の場合、実施したか否かでの評価となる。また、適切さに関する評価段階を細分化する方式もある。「1-0」の場合、適切とは言えないものの取り組んではいる場合にどのように評価するかという課題がある。一方で、評価段階を細分化した時には、各々の評価段階における評価段階毎の基準設定の具体化という課題と評価者間による評価の差異への懸念もあり、それぞれの長短がある。

本OSCEでは、適切さを評価することと、評価者間による評価の差異への懸念を考慮し、3段階評価による評価方式とした。なお、評価段階は、「3: 適切である」「2: まあまあ適切(的確)」「1: 適切でない」の3段階である。

さらに、評価項目と評価水準の考え方(図I)は、実習前の「3: 適切(的確)」である、実習中や実習後の「3:

適切（的確）である」の水準は同一のものとし、「実習前だからこのくらい出来ていれば『3』でよい」「実習後にはこのくらい出来なければ『3』とはならない」などの、時期によって異なるものではないことを明確化した。

これは、実習前評価システムをクリアした学生が、OSCE時点では未到達である項目もOSCE後の実習前教育、実習、実習後教育を通じて、すべての項目において到達が目指されるとの考え方によるものである。

評価段階	実習前	実習中	実習後
3:適切である	←	同一水準	→
2:まあまあ適切（的確）である	←	同一水準	→
1:適切でない	←	同一水準	→

＜図 I 評価段階と評価水準の考え方＞

これらのOSCEを、相談援助実習履修学生（n=101）に対し、相談援助実習指導における事前説明（資料配布、OSCE動画視聴）の上で、2015年6月2日（実習日誌翌朝提出）に実施するとともに、学生調査と評価者調査を行った。

5. 調査概要

1) 学生調査

(1) 対象と方法

OSCEを受験した学生（n=99）に対し、インターク面接及びアセスメント報告に関する設問は、2015年6月2日の試験終了後の控室で無記名の質問紙に回答を求め、実習日誌記載・提出及びOSCE全般に関する設問は、OSCEの翌週となる6月9日のCBT終了後にコンピューター入力によるアンケート調査を行った。

(2) 調査内容

OSCEの目的理解、OSCEの形式で技術が図られることの有効性、試験結果予測、事前学習状況、各試験項目（ブース）のインストラクション用紙の指示内容、試験時間、評価項目、試験問題の適切さについて調査を行い、各々の調査項目に対して4件法による回答と、OSCEに際してどのような事前学習を行ったか。OSCE（技術試験）で測られると良いと思われるスキル、OSCE（技術試験）に関する意見や改善点、各試験項目（ブース）に関する意見（改善点も含めて）に関わる自由記述項目を設定した。

(3) 倫理的配慮

アンケート調査は無記名で行い、結果は、統計的な処理を施し個人が特定されないこと、研究目的以外に使用

しないこと、研究への協力は学生の任意であり、研究協力しないことでの不利益は生じないことを書面と口頭で説明し、提出を持って同意を得たこととした。

2) 評価者調査

(1) 対象と方法

OSCE評価者を担当した評価者30名を対象とした。内訳としては、内部評価者12名（学科教員）、外部評価者（社会福祉士）12名（内訳：医療分野8名、障がい分野2名、地域包括1名、スクール1名）、クライアント外部評価者（社会福祉士）6名（内訳：医療分野3名、障がい分野1名、高齢者入所1名、高齢者地域1名）であり、外部評価者は全て実習指導施設・機関の社会福祉士または過去に実習指導を担当した社会福祉士である。

方法としては、OSCE当日に振り返り会を実施し、振り返り会の逐語録を作成し、本研究のデータとするとともに、評価者対象の記述式アンケート調査を実施した。

(2) 調査内容

OSCE振り返り会では、アクシデント・インシデントを確認した上で、評価・運営にあたって気づいた点や改善点等について意見交換を実施した。記述式アンケートでは、運営、評価、試験問題、評価者体制、実施方法、事前打合せ会、事前連絡等について気づいた点、検討課題に関する自由記述を設定した。本研究では、この中から「試験項目に対する評価」に関わるデータを抽出し検討した。

(3) 倫理的配慮

評価者には、研究の目的、意義、協力依頼内容、研究に協力しない場合にも不利益を受けない事、協力に同意した場合もいつでも取り止めできること、協力を取り止めても不利益を受けない事等を文章と口頭で説明し、書面で同意を得た。

6. 研究結果

1) 学生アンケート調査結果

受験対象者101名のうち、本試験当日欠席した学生2名を除く99名に対し行った。

○インターク面接（Aブース）、アセスメント報告（Bブース）

回収数：99名（回収率:100.0%）

有効回答：99名（有効回答率:100.0%）

○実習日誌記載・提出（Cブース）、OSCE全般

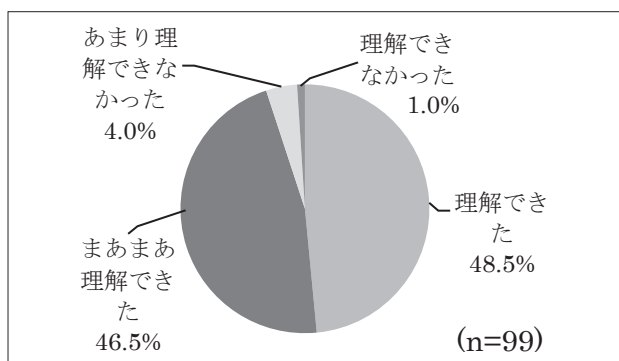
回収数：99名（回収率:100.0%）

有効回答：99名（有効回答率:100.0%）

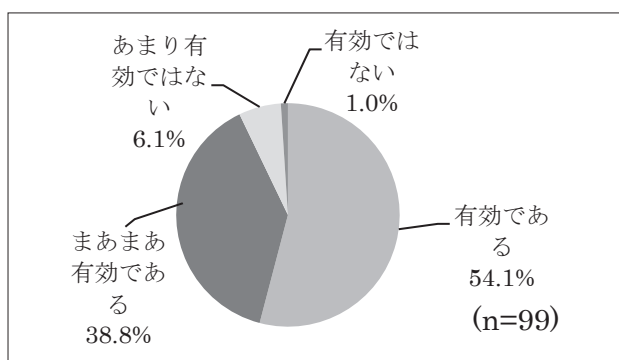
本研究では、OSCEの目的理解と有効性、OSCEの試験項目ごとの課題設計における構成要素に対する回答に

関して、以下に整理しまとめることとする。

学生調査の結果としては、「OSCEの目的について理解できましたか(図Ⅱ)」との問いに対し、「理解できた」48.5%「まあまあ理解できた」46.5%を併せた「(まあまあ)理解できた」95.0%と回答した。「OSCEの形式でスキルが測られるのは、有効であると思いますか(図Ⅲ)」との問いに対し、「有効である」54.1%「まあまあ有効である」38.8%を併せた92.9%の学生が、「(まあまあ)有効」と回答した。



<図Ⅱ OSCEの目的について理解できましたか>



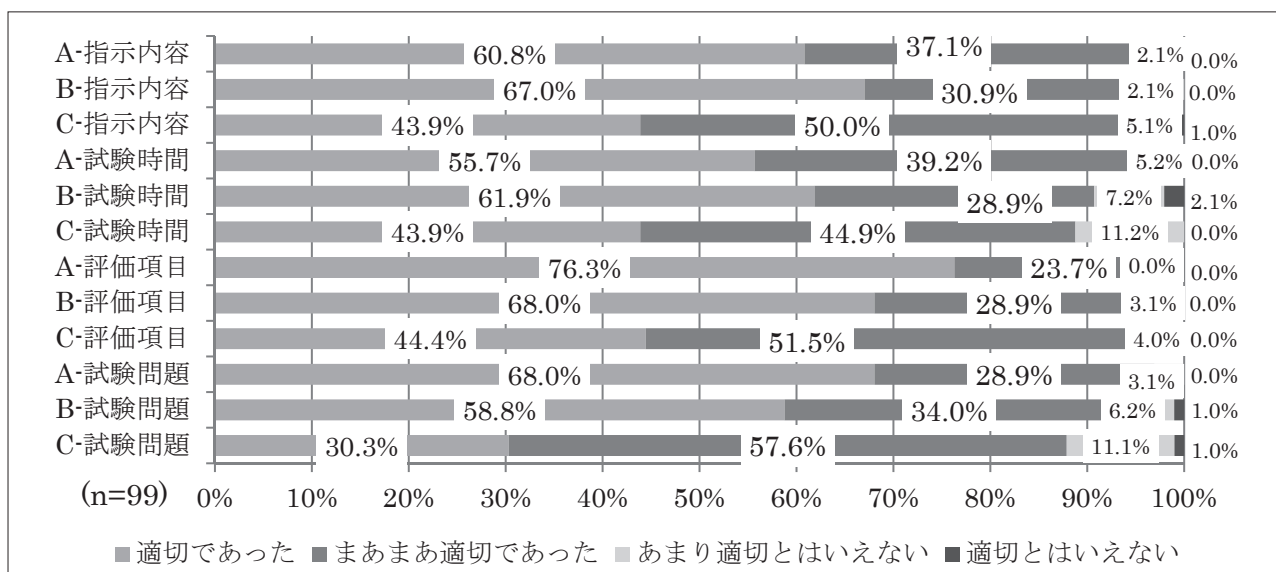
<図Ⅲ OSCEの形式でスキルを測られることは有効であるか>

さらに、試験項目の構成要素別(図Ⅳ)では、「適切である」「まあまあ適切である」を併せた「(まあまあ)適切」との回答が、指示内容では、インテーク面接97.9%、アセスメント報告97.9%、実習日誌記載・提出93.9%、試験時間では、インテーク面接94.9%、アセスメント報告90.8%、実習日誌記載・提出88.8%であった。評価項目では、インテーク面接100.0%、アセスメント報告96.9%、実習日誌記載・提出95.9%。試験問題では、インテーク面接96.9%、アセスメント報告92.8%、実習日誌記載・提出87.9%であった。

自由記述では、アセスメント報告の「指示がわかりやすかった」に代表されるように肯定的な記述が目立った。構成要素別では、指示内容に関して、アセスメント報告の設定が、「事例の答えをみんなでシェアする可能性がある」との指摘があったものの、「予想していなかった追加情報を目の前にして頭が真っ白になった」などの記述もあり、追加情報を加えた再アセスメントを報告するという設定が、試験項目の目的に対応した試験効果を示していることがうかがえた。

また、実習日誌記載・提出の指示内容・設定を踏まえて、「記憶をたどって書くことで相談者の表情等を思い出しながら書くことができた」といった情報記銘力が求められる試験項目の設定となっていたとの評価がうかがえる記述がある一方で、それ故に「記憶があいまいなためAブースでのメモも使用しても良いのではないか」といった指摘もあった。

さらには、日誌の記載量に関して、字数指定なしとしている指示内容に対して、「枚数指定や字数指定があったほうが良い」といった記述もあり、評価を伴う試験における実習日誌記載という試験特性を踏まえ、一定の記



<図Ⅳ 試験項目(ブース)構成要素別結果>

載量指定があった方がよいとの指摘もあった。

評価項目に関しては、インテーク面接での「(自らの)質問が漠然としていた」「沈黙への対応も自分なりに工夫した」との記述や、アセスメント報告での「不足情報も適切に盛り込むことができた」との自己評価を可能としていることがうかがえる記述がみられた。

試験時間に関しては、「とても適切であった」とする一方で、「時間が短かった」との記述もあった。

試験問題に関しては、アセスメント報告事例が、「事前学習の内容によって結果が左右される」試験問題であったとの記述とともに、「(3事例に)情報量の差があった」と、頁数だけではなく、事例に含まれるアセスメントにかかわる情報量の差異に関する指摘もあった。

2) 評価者調査結果

評価者調査からは、「以前より力量アップを感じます」との経年的変化に関する内容や、「みんなよく準備してきたなというのが分かった」「どこがポイントかおさえきれていない学生は表面的な情報が中心になる」との評価すべきポイントが明確化しているとの認識がうかがえる内容がみられた。一方で、指示内容で例示した「物理的環境配置が(教室の構造上)異なっていたため戸惑った」との意見もあった。

さらには、振り返り会での意見交換を踏まえ「(評価者の)要求水準が年々高くなっている」と思うが、学生も出来るのではないかとの感覚をもっている」との意見もあった。

また、インテーク面接は、迎え入れの態度に関する「導入部分はほとんどの学生が出来ている」が、「冒頭の一連の流れが長い。面接技法の評価が実質的に4分程度」となり、「主訴をピンポイントで理解するというのは難しい」と、導入部の簡素化といった評価項目の見直しに関する内容も多数みられた。

アセスメント報告については、「準備状況がはっきりとわかる事例であった」との試験問題に対する評価が得られた。さらに、「質疑や話し合いのプロセスを体験させる仕組みにした方がよい」「セッションしてはどうか」といった設定や評価項目に対する意見がみられた。

7. 考察

学生及び評価者の評価によると、9割以上の学生が「OSCEの目的について理解」し、「OSCE形式でスキルが測られる」ことを肯定的に捉えているとともに、3つの試験項目の全ての構成要素を8割以上が肯定的に捉えているなど、全般的に肯定的評価がなされていることが明らかになった。

さらに、学生及び評価者からも、「どこがポイントか」がわかる評価項目である点や、「準備状況」が分かったり、「事前学習の内容によって結果が左右され」たりする試験問題(事例)である点など、概ね肯定的評価がなされた。

今回実施した相談援助実習におけるOSCEの試験項目は、学生及び評価者の主観的評価によると、ある程度妥当であると評価されていることが示唆された。今後は、この示唆をより確実なものにしていくための詳細なデータの収集や分析が必要である。また、評価項目の改良に向けた検討事項も示されており、相談援助実習におけるOSCE試験項目をさらに充実させていくための検討も今後の課題であろう。

8. 謝辞

本研究に参加協力していただいた皆様、調査に快く回答いただいた学生及び評価者の皆様に心より感謝の意を表します。

なお、本研究は、JSPS科研費(挑戦的萌芽研究)26590114の助成を受けた研究の一部として実施したものである。

引用・参考文献

- 伴信太郎(1994)「OSCEによる『臨床入門』実習の評価」『医学教育』25(6)、327-335。
- 北海道ブロック社会福祉実習研究協議会編(2011)『資料集 北海道のソーシャルワーク実習』北海道ブロック社会福祉実習研究協議会。
- 北海道ブロック社会福祉実習研究協議会・一般社団法人日本社会福祉士養成校協会北海道ブロック・一般社団法人日本社会福祉教育学校連盟北海道ブロック(2016)『2015年度北海道ブロック活動報告書』北海道ブロック社会福祉実習研究協議会事務局。
- 近藤尚也、巻康弘、他(2016)「相談援助実習におけるOSCE結果の活用実態」『北海道医療大学看護福祉学部学会誌』12(1)、99-103。
- 久能由弥、池田雅子、他(2009)「北星学園大学における実習前評価システムの試行結果について(2) - OSCEの可能性と課題 -」『2009年度北海道ブロック研究協議会報告書』、86-92。
- 巻康弘、川勾亜紀奈、他(2014)「相談援助実習におけるOSCE(客観的臨床能力試験)の開発」『北海道医療大学看護福祉学部紀要』21、1-11。
- 大滝純司(2007)『OSCEの理論と実際』篠原出版新社。

<資料 試験項目別評価項目及び評価ポイント（例）>

①試験項目名：インテーク面接

◎評価者評価項目（22項目）

1 クライアントを迎え入れる態度
2 椅子の勧め方
3 対面の位置の取り方
4 始めの挨拶と自己紹介
5 面接への倫理的配慮
6 主訴の聞き取りの開始
7 質問技法の適切さ
8 言語追跡の適切さ
9 語りの促進の適切さ
10反映技法の適切さ
11確認技法の適切さ

12焦点の当て方の適切さ
13身体技法の適切さ
14視線の適切さ
15音声の調子の適切さ
16沈黙への対応の適切さ
17主訴の要約と確認の適切さ
18-a 質問攻めではなかったか
18-b ワーカー側が沈黙に陥らなかったか
18-c 早すぎる指示・助言等ではなかったか
18-d メモ取りに集中していなかったか
18-e 不適切な表現はなかったか

◎クライアント評価項目（6項目）

CL-1 気持ちよく迎えられたか
CL-2 ワーカーの役割をよく理解できたか
CL-3 滑らかに相談関係に入れたか
CL-4 相談事を十分に聴かれたと感じられたか
CL-5 相談事を十分に話したと感じられたか
CL-6 相談事を十分に理解されたと感じられたか

◎評価チェックリストの評価ポイント（例）

2：椅子の勧め方

・迎え入れて、相手に椅子を勧めるときの声かけ。椅子を勧める際の動作の明確さ、丁寧さ。

※歩行状態に不安があるなどの場合を除き、「特定の椅子を引いて勧める行動」は、クライアントの面接導入にあたっての自由度を奪う可能性があることから「相応しくない」行動と判断する。

3：対面の位置の取り方

・相手の座るのを待って、SWは自分の座る位置を決める。

・原則的には、真正面ではなく、多少ずらした位置に座る。

※なお、クライアントに圧迫感を与えない環境（「テーブルに十分な間隔がある場合」など）においては、真正面でも支障が無いこともありうる。しかし本OSCEの物理的空間配置では、「真正面の位置から少しずらして座る」ことが望ましい対応とする。無理に90度にする必要はない。

4：始めの挨拶と自己紹介

・来所へのねぎらい（言葉の説明）の言葉（相手の労苦をいたわる言葉であり、感謝の言葉ではない）。クライアントとの関わりも導入場面として重要である。

・自己紹介することの導入。

・自己紹介の中身として、所属機関、職名、氏名、そしてここでの役割を含んでいるかどうか。

②試験項目名：アセスメント報告

◎評価者評価項目（20項目）

1 クライアントの基本情報	5 CLの主観的ニーズ把握	9 口頭報告技術の適切さ：
2 本報告の主たるポイント	6 客観的ニーズ判断：①問題把握	①報告の切り出し方
3 CL像の把握（人の側面）：	②ストレングス	②報告のメリハリ
①身体的・精神的側面	③客観的ニーズ判断	③終了の仕方
②心理的・情緒的側面	7 不足している情報の指摘	④適切な表現方法
③社会的側面	8 当面の援助目標と必要情報へのアクセス：	⑤音声の調子の適切さ
4 CL像の把握（環境の側面）：	①当面の援助目標	⑥全体的なまとめ
①クライアントの環境	②必要情報へのアクセス	
②社会環境		

◎評価チェックリストの評価ポイント（例）

1：クライアントの基本情報

- ・最低限、クライアントの性別・年齢・職業（必要なら学歴・職歴）が報告される。
- ・必要に応じて、家族構成（員数・続柄等）についても報告される。

2：本報告の主たるポイント

- ・本クライアントの抱える主たる問題点や課題のポイントとなる点が報告される。
- ・報告内容の主たるテーマ等が報告される。

③試験項目名：実習日誌記載・提出

◎評価者評価項目（8項目/うち1項目は必須項目）

1 実習日誌は指定日時に提出されたか（必須）	3 実習日誌記載形式・方法：	4 実習日誌記載内容：
2 必要事項の記載と目標設定：	①記載形式の適切さ	①事実（場面・事柄）の記載
①必要事項の記載	②記載方法の適切さ	②事実に対する解釈・分析・感想の記載
②本日の重点目標	③使用する概念や用語の適切さ	

◎評価チェックリストの評価ポイント（例）

3 ②：記載方法の適切さ

- ・記録は、実施結果として残されるべき重要なものである。このため、ボールペン・万年筆で記載される必要がある。鉛筆書きや消えるボールペン等での記載は記載後に改ざんされる可能性を有するため不適切である。
- ・修正が必要な場合、元の記載は消さずに訂正箇所に線を引いた上に修正印を押す。

Evaluation of OSCE test categories for Field Practicum for Social Work : Quantitative and qualitative data analysis from students and evaluators

Yasuhiro MAKI Naoya KONDO Akina KAWAWA
Maki FUKUMA Nozomi MATSUMOTO Yukio SUZUKI